

<会員による自著紹介>

学びあいが生みだす書く力 —大学におけるレポートライティング教育の試み—

鈴木宏昭（編著）¹⁾

紹介者

杉谷祐美子（1, 5, 6 章分担執筆）¹⁾・

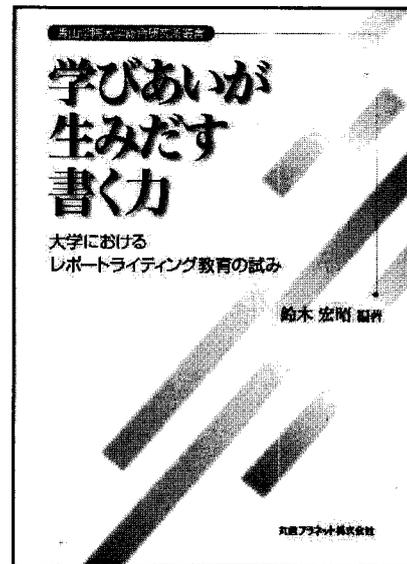
小林至道（5, 6 章分担執筆）²⁾

1) 青山学院大学

2) 青山学院大学大学院

丸善プラネット株式会社（2009 年発行）

定価 2,400 円（税別）



本書は、ユニバーサル段階を迎え、大学の教育力や学生の学習成果が問われるなか、同じ大学に集う研究者たちが大学生の「書く力」の育成をめざして行った実践研究の報告書である。

執筆者の研究分野は、認知科学、高等教育、図書館情報学、メディア社会学など多岐にわたるが、そこには共通のこだわりがあった。一つは、単なるハウツー的知識の伝授にとどまらず、学生自らが問題を発見し考えること。もう一つは、学生同士が触れ合い、議論を通じて、「学びあう」こと。この2点を重視しながら、初年次生を対象とした授業実践を展開し、分析、考察している。

内容は、8章構成となっている。1章、2章では、「書く力」の重要性を述べたうえで、その育成にあたって協調学習を用いる意義と利点を論じた。特に、レポートライティングにおいて困難な「問題設定」と「論証」を習得する鍵が協調学習にあることを論じている。続く3章から6章では、これを実証するために、相互レビュー、ジグソー法、ブログなどを利用した授業実践を示している。そこでは、他者との相互作用を取り入れることで、気づきや振り返りが生じ、レポート作成過程のどこにそれらの効果が働くのか、詳細に検討している。7章では、レポートライティングに必要な文献調査力、活用力の習得について、図書館情報学の知見を初年次教育へ応用した授業実践例が検討された。最後に8章で、総括と今後の課題が示されている。

ライティング教育に関する研究は少なくないが、そのなかでも授業実践の成果や効果を実証しようと積極的に取り組んでいる点に、本書の大きな特徴がある。また、取り上げた実践例では、大学院生がTAとして授業の企画、運営面にまで関わっている。大学院生の教育・研究に関する資質能力を高めるプレFDという観点からも、興味深いものとなろう。本書を通じて、会員各位や大学関係諸氏には、研究に裏打ちされた教育活動の重要性を理解していただければ幸いである。